



2012年10月15日発行（隔月刊）



# う 羽 化 か

ISSN1880-8646  
2013年10月  
第96号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会  
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290  
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣  
編集責任者 木 下 和 久

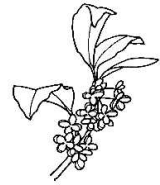


## 目 次

漢点字の散歩 (34) (岡田健嗣) .....	1
点字から識字までの距離 (91) (山内 薫) .....	7
東京漢点字例会報告とわたくしごと (木村多恵子) .....	14
漢文のページ .....	19
ご報告とご案内 .....	21
編集後記 (木下和久) .....	23
(有)横浜トランスファ福祉サービス (広告) .....	23

## 漢点字の散歩（三十四）

岡田 健嗣



### 読書

「（前略）蛇足とは思いますが、もう一言付け加えてさせていただきます。／ 視覚障害者の読書の方法として音訳書の聴読が大変大きなウェイトを占めるようになって参っております。／ しかしこれが本当に読書と言えるのか、これまでにどなたも問うたことはありません。／ しかも中途失明者が増えているのと、先天盲でも私どものような単純な視覚障害者が減って、点字使用者は激減しています。／ そこで皆様のような晴眼者の方が読書をするということを読書と位置づけた場合、視覚障害者が読書をするとは、どんな行為なのか、考えてみたいと思います。／ 面倒なこととは省いて、飛ばして申しますと、皆様が文字を目で追って読まれるということは、文字が目から入って来て、脳に到達して、そこで文字の音・意味が分離されて、文意を理解するということになるのではないかと思います。／ つまり文字が目から脳へ到達するまでは、それが文字であるかさえ、理解には至らないということ

です。脳に到達して初めて文字であることを認識して、その意味を理解するということで、そこに一つの文章にも様々な理解が生じる謂われがあります。／ そこで視覚障害者が聴読するということを考えますと、対面でも録音でもかまいませんが、音訳者の方が右のようにして読み込んで、それを口から発語された音声で、耳から入れて脳に達して、そこで了解するというプロセスになるかと思えます。／ ここで大事なことは、音訳者の方が理解したものを音声にされて、それが耳に入り、脳に達するというプロセスだということ、そこには文字は介在しませんし、しかも既に他者の理解が含まれているということです。喩えは適切ではないかもしれませんが、聴読というのは、あたかも雛鳥が親鳥から口移しに餌を受け取るような行為で、雛鳥は巣立ちまでの期間そのようにして成長を待つわけですが、聴読する視覚障害者は、永久にその情況から抜けられない情況にあるということです。／ 従って、私は漢点字訳書の製作活動を行っておりますが、これもまだどなたも試みていなかったことに挑戦することになったのですが、お陰様で、その方法も掴めてきたと、羽化の会の皆さんには感謝しておりますが、今回の聴読者へのサービスを念頭に置いた音訳書の作成は、右に申したようなプロセスに、適切な、

しかも過不足ない情報を載せることを、何とか実現させなければいけないと、無理なお願いであることは承知の上でお願いしております。（後略）」

これはつい先頃、現在進めております『常用字解』の音訳版の製作プロジェクト・グループ向けのMLに書いたものです。推敲もせぬまま書き殴ったまま送信したもので、本誌に収録するなら改稿すべきとも思いました。が、敢えて誤字の訂正だけに留めて、このような荒れた拙稿を収めることにしました。と言うのも、このような考えは、私が読書を意識し始めたころから持ち続けてきたもので、これまでごくプライベートな、あるいは本会の会員間のようなごく身近な間で口にし、あるいは書いたりもしましたが、このプロジェクトのような非公の席に持ち出したのは、私としても初めてのことでした。もっともこのプロジェクトも、スタートしてから既に二年余りが過ぎて、この間には正に丁々発止とも言えるやり取りもあつたわけです、その意味では非公と言うのでなく、既に身近な間柄と申しても、ご一緒に取り組んで下さっておられる音訳者の皆様からの異論は、なかるうかとも思われま

音訳に携わっておられるボランティアの皆様に向けての発言であれば、反感を覚悟せぬものではなかったことを、付言させていただきます。

そこで右の拙稿の前提となっている「読書への意識」とはどういうものだったか、述べてみたいと思えます。

本誌では毎回のごとく私が読書を意識し始めたころのことを申し上げておりますが、今回もそこから話は始まります。私は盲学校を出るまでは読書といえる読書はして参りませんでした。それが盲学校を出てみると、読書が一人の人間を形成するのにどれだけの力を発揮するかを、思い知らされたのでした。裏から言えば、私の読書の貧しさが、どれだけ私を栄養不良に陥らせていたかを、身を以て知ったのでした。そこでいわゆる乱読を試みることにして、点字図書館の蔵書のうち、主立った文学書、漱石や鴎外、トルストイやドストエフスキーなどを、片端から読んだのでした。当時の視覚障害者の読書の手段といえ、カナ点字で点訳された点字書（現在もそれが主流ですが）を触読する方法と、磁気テープに録音された音訳書（当時はカセットテープではなく、オープンリールと呼ばれる大掛かりなテープで、録音・再生に用いるレコーダもテープも、大変高価なものでした。）を聴読（ここで

は、音訳された音訳書を耳から聴いて読書することを呼びます。)する方法でした。片端からの読書とは、文字通り手当たり次第、思い当たった物、人から聞いて興味を惹かれた物、蔵書目録を隅から隅まで調べてノートを作るなどして借り出して読んだということです。点字書というのは大変小規模なもので、一つのタイトル、例えば『カラマゾフの兄弟』であれば、二〇分冊を遙かに超えています。それで点字図書館の職員はあたかも、これだけの大部な書物があります、と胸を張ったものでした。点字図書の一冊に収まる規模が乏しいために、点字図書館の蔵書は、一見豊富なものに見えるのでした。しかしその大半が私には縁の遠いもの、流行作家の大衆向けの小説であったり、ハウトゥー物であったりして、数年のうちに、蔵書のうちに読みたい書物を見つけれなくなつたのでした。

そのようにしているなかで、以前本誌にご紹介しましたように、友人が本を読み上げてくれるということがあって、私の読書に、点字図書館には入らないであろう書物への扉がひらかれるようになったのでした。そうして書物に関する知識も格段に広がって行き、同時に、一般の皆さんが本を読む現場に、初めて触れることになつたのでした。それは誠に目を見張る思いの

経験でした。盲学校に居るころの晴眼者の皆様との付き合いは、家族とごく身近な友人と、そして盲学校の先生方に限られていて、そこには読書の現場は残念ながらありませんでした。先生方は私たちの前に読書をする姿をお見せになられませんでしたし、友人たちとは、読書以外の付き合いに終始していたからでした。

さて何に目を見張らされたか、これは今でも新鮮な思いで振り返ることができます。ある一冊の本を読み合わせます。一節・一章を担当者が読み上げて、参加者は同じ速度で黙読します。私はそれに耳を傾けます。一区切り読み終えたところで担当者は、自らの言葉に置き換えて解釈します。それに応じて参加者から異なつた理解や疑問や質問が提出されます。これは誠によくある風景です。私も読み上げられた文章を反芻しようとして頭を巡らせません。しかしこの辺りから他の参加者とテンポがずれてきます。どのようにされるか、参加者は視読(晴眼者の読書法を仮にこう呼びます。)をしているので、幾度も読み返している様子です。私は何とか読み上げられた文章の記憶をたどっています。そのようにしながら質疑が交わされますが、そこで分かるのは、記憶とは誠に頼りないものだというところで、一つの文章を丸ごと覚えて、反芻するなど

ということとは、私には不可能だということを知ったのでした。読書とは、文字通り「書かれた文字を読む」ことだったのでした。一言一句を文字を追いつながら、文意を理解し解釈する、これが本を読み合わせることでした。

こう言えばあまりに当然のことで、何に驚いているのか読者諸兄姉にはお分かりにならないかもしれない。一言一句を文字に当たるといふこと、このことがそもそも私には驚きとともに、力の及ばない、手の届かない、遙かな彼方のありようと思われたのでした。

然う斯うしているうちに私にも余裕ができたのか、周囲の様子が徐々に分かるようになってきました。参加者の反応にも個性のあることが分かってきました。参むしろ本を読むときの癖のようなものという方が適切

かもしれません。予めかなり読み込んで来る人、その場で初めて本を開く人、担当の箇所だけ下読みをする人、様々でした。どうしてそのようなことが分かるかと言えば、勿論読み上げるときの滑らかさを第一に挙げなければいけません。しかしそればかりではありません。充分読み込んできた人、担当箇所だけ下読みをしてきた人、ぶっつけ本番の人、それぞれの理解度や解釈の展開に、どうしても差ができてしまいます。さらに充分読み込んでいると思われる人の間でも、その

理解に相違が見えてきます。この相違こそが、読書会の醍醐味と言つても過言ではありません。私も予め読んでおればと思わなかつたとは申せません。

さらにもう一つ、読み込んできていると思われる人たちは、意見を交換しながら本を読み返しているのですが、どうやら文字を追っているのではなさそうだと、私は気づきました。予め読んでこなかつた人は、その場で文字を追うのに汲々としていて、意見の交換には間に合いません。何を読み取るかといふところは、どうやら文字を追つていては間に合わないということを、私は理解したのでした。既に文字ではなく文の世界に、文を超えた何か、言葉の織りなす像の世界に、心を委ねること、それが読書だといふことを、知ることになったのでした。

そのようにして私も、読書に親しみを深めたのです。参むしろそれによって、それまでに持ち続けていた読書への乖離感が、大きくなつた感を強くしたのでした。カナの点字を触読し、音訳書を聴読しても、墨字を目で読んでいる人の、文字を超え、文を超えて像に至るのが読書だとすると、到底私のやつているのが読書だと言ふことはできない、そう感ぜざるを得なくなつて参りました。カナの点字書の触読では、五十音の文字を追うのがやつと、音訳の聴読では、文字で表さ

れた書物を読むのではなく、流れている音声を聴く、音声の流れに身を委ねるところまでで精一杯で、文章を総体として捉えたという実感には、ついに至りませんでした。

もう暫くそのような人を観察して見ることにしますと、これは本誌のレギュラー執筆者である・現ひきふね図書館の山内薫さんにも当てはまることですが、書物を読む人は、まず文字を追うことから始めるには違いありませんが、直ちにその理解を、意識として目を通してその文面に投射する、さらにその誤差を受容して再度投射する、このような行為を猛烈な勢いで繰り返して行っているように感じられます。これは読書が能動的な、積極的な行為であることを、信じられる一瞬でした。がそれとともに、当時の私には到底真似のできないものでもありました。

冒頭の拙稿にもどって、その要旨を整理してみますと、①視読のプロセスは、文字を追うことから始まるが、要旨を把握すると直ちに目を通して文章と脳による理解とが交信される。これによって理解が一定の程度まで整理され純化され、高度化される。目で受け取り、脳で理解し解釈し、目から文章に投射する、この一連のプロセスこそが、一般に行われている視読による「読書」であって、正に「読書百遍」とは、このプ

ロセスを指した格言である。私はこのプロセスを「読書のフィードバック」と呼ぶ。

②視覚障害者の読書は、カナ点字の文章を触読する方法と、音訳書を聴読する方法が採られている。あくまで私の経験ではあるが、点字の触読とは、漢字仮名交じりで表されている文章を、カナの点字に書き改められたものを指先で触れて読むのだが、もともとカナ文字だけで表されているものならともかく、漢字とカナ文字で織り上げられている日本語文を読むには、あまりに必要な情報が足りないのではなからうか。私には、視読の読書のプロセス（読書のフィードバック）を獲得するには、この方法では到底至らないように思われる。一方聴読は、音訳者が視読して、書かれている文章に沿って発語したものを、視覚障害者が耳で聴き取って理解し解釈するものである。音訳者の読書の成果である理解と解釈に裏打ちされて発語されたものを、耳で受け取る行為であって、そこでは視読の能動性は、音訳者に委ねられていて、視覚障害者の関与できる余地は、ほとんどない。また聴読の対象は文字ではなく音声であって、視読の対象である文字を音声に実現することは、恐らく不可能である。試しに晴眼者の皆様の前に、活字書とそれを音訳したメディアを置いて、お好きな方を取ってお読みくださいと勧めてみ

る。音訳書を手にとつて試し聞きなさる方はあるかもしれないが、それで読書しようと試みる方は、恐らく皆無のほずである。私はずっと以前に、これに近いことを試してみた。晴眼者の皆様には、音訳書は、書物ではないのである。

③しかしながら視覚障害者は、視覚を失っているのである以上、視覚によらない読書の方法が構築されなければならぬ。その一つの有力な方法が、本会の活動である（漢点字）の触読であるが、残念ながら視覚障害者の有識者と言われる人々には、（漢点字）は極めて評判が悪い。しかも視覚障害の現状を見ると、先天的な障害者は急速に減少している一方、中途失明者、しかも高齢に達してからの失明者が、これも急速に増加しているのが現状である。そして私には驚きであつたのだが、私の若いころには聞かれなかつた新しい主張が、この増加している高齢の視覚障害者の方々の中に、大きな位置を占めていることを知つた。その主張とは、「点字の触読はしたくない、読書は全て聴読で行いたい」というものである。この二十年、あるいはそれ以前から、読書は聴読だけという声を、多く聞くようになってきた。である以上、恐らくわが国の視覚障害者の読書は、触覚ではなく、聴覚によるものが通常ということになって行くのがトレンドであろう

し、それに応じた音訳書の製作が求められて来るのが必定と捉えなければならぬであろう。

やや長くなりましたが、整理し付言すれば、以上のようになるかと思われます。

本会は活動を始めてから十七年余りが経ちました。私の漢点字の触読、漢字仮名交じり文に日常的に触れる環境を得るようになってから、十七年が経つたことになりました。これは私にとつて、珠玉のような経験で、この経験から、視読のそれと同様のものかは分かりませんが、肉体的な感覚として（読書の）「フィードバック」を感じています。古い表現ではありますが、「書物との対話」を実感しております。また、漢点字の触読の機会が増えて、日常的に漢点字と接するようになったころ、触読する指の感覚に、左右差のあることに気づきました。もともと私は、カナ点字の触読は右手が主で、左手はそれに添えるように使つていましたが、漢点字の触読では、全く逆転して、左手が主で、右手はそれに添えるようになってしまいました。このことと「フィードバック」は、無関係ではないのではないかと、そう考えております。

しかしこのようなことは、今のところ私一人に関わる事柄で、私にとつては誠に幸いなことで、横浜と東

京の会員の皆様のお力に負うものですが、残念ながら決して普遍とは言えないのが現状です。

『常用字解』の音訳のプロジェクトの活動を開始して以来、聴読を、如何に視読のレベルに近づけるかということを探索して参りました。この活動にご参加下さっている音訳者の皆様には、これまでに出席されたことのないニーズが突きつけられた思いをなさっておられるものと存じます。その理由は、先にも申しましたように、聴読による読書は、音訳者の理解と解釈に全面的に負っているもので、まずは音訳者の文章の理解であり、解釈の質が問われてきます。その次に、通読するばかりでなく、文字や意味や配置などを音訳者の説明として、文章の流れを妨げないようにしつつ、挿入することが求められます。これは本来最終的な読者である視覚障害者に帰せられなければならない事柄ですが、現在の視覚障害者は、自ら文字に距離を置いており、その分音訳者に負担を求めていることなのです。

このように、通常音訳者は、文面を正しく読み上げることが求められるわけですが、ことはそれだけでは済まないところまで来ています。私はこういうニーズの高度化に沿った音訳のあり方を、『常用字解』の音訳を通して提出したいと考えているところです。

## 点字から識字までの距離(九一)

野馬追文庫(南相馬への支援)(九)

墨田区立ひきふね図書館 山内 馨

### 南相馬へ(一)

子どもゆめ基金(独立行政法人国立青少年教育振興機構)助成活動の「被災地の子どもたちを本で支援する活動」の事業で「子どもたちへ(あしたの本)プロジェクト」主催のイベントを十月二十七日と十一月二十三日に計画しているが参加しないかというお話しがKさんからあった。十月はあいにく都合が付かなかったが、十一月二十三日の勤労感謝の日はあいている旨Kさんに連絡し、当日は午前十時から南相馬市原町牛越仮設住宅第二集会所でKさんと共に「おはなし&あそび」の会を行うことになった。初回の十月二十七日はPIPPIO (<http://casa-pipio.jp>)という二人組のグループが南相馬市鹿嶋区小池長沼東仮設集会所で「おはなしとあそび」の会を行った。十月二十七日のレポートは以下のようなものだった。

「お年寄り二名 子ども延十二、三人くらい(出入りがあって) やんちゃ坊主が多くて、賑やかでした



が、楽しかったですよ。十時から十二時、のんびり時間が流れました。でも男の子達、なかなか帰ろうとしませんでした。一人の男の子は集会所の前に少し拡大して貼ってくださっていた今回のチラシを、僕これららつていくとはがしていました。」(Kさんの報告)

以下はこの催しを映したパワーポイントから

「南相馬市小池長沼応急仮設住宅東集会所、津波で家を流されてしまった方たちが多い。／絵本『あーといてよあー』(小野寺悦子 作、堀川理万子 絵、福音館書店) 子どもたちの声は忘れられませんが、腹の底から、声をだすことで、嫌な思いが少しでも飛んでいったら、と願うばかりです。あんなに大きな声を聞いたのは、初めてかもしれません。嬉しかったです。(prio 武本佳奈絵さん)／野馬追文庫送付本『じゅげむ』子どもたちは大きな声で一緒に長い長い名前をすらすらと・・・／絵本『やきいもするぞ』(おくはらゆめ 作、ゴブリン書房) 子どもも大人も大笑い／小池長沼の仮設には登録上は二十数名の子どもが住んでいるそうです。赤ちゃんも妊婦さんもあるそうです。ひとりですんでる高校生もいるそうです。ただ、毎日そこに住んでいる子どもたちがどのくらい実際いるのかは、付き添ってくださった社協のこ

の仮設の担当のスタッフさんでもつかめない。前日の金曜日夕方のバスで福島から南相馬に向かいましたが、七、八組の幼い母子が同乗していました。もしかしたら週末だけ南相馬に帰る母子なのだろうと思いましたが。子どもたちは皆よく知り合っていて、皆が兄弟のよう。遠慮もなく、お前はうるさいから帰れとか：、でも皆別々の学校に通っていたり、何回も引越して今はここにいる子も。／八十七歳のUさん。津波すぐそこに来た。真っ黒く光ってくるんだよ。叫びながら逃げたから、今も片方の耳が聞こえない。怖かったよ。ほんとに怖かった。すぐそこまで津波が来たんだよ。逃げたんだよ：怖かったよ：／お友達を誘って集めてくれ、絵本も夢中で聞いてくれて、私たちが帰る最後までいて見送ってくれたA君。来週も来てね：。って言うてくれた。ありがとう。元気でね。」映像にはお話しその他ワークシヨップでサブローごま(円盤状の厚紙の真ん中にビー玉がついていて、ビー玉が軸になってなめらかに回るこま)をみんなで作っている写真もある。

さて、十一月二十三日は新しくできた牛越仮設住宅第二集会所で行うことになっているが少なくとも九時には南相馬にいないと間に合わないとのことで、前日に南相馬のホテルに泊まることとなった。

当日のポスターには「おはなし&あそび」「おおきな  
おおきなおいも」の巻紙芝居やります！二〇一二年一  
月二三日（祝）一〇・〇〇く 南相馬市 原町牛越  
仮設住宅第二集会所 参加費無料、申込不要 対象  
〇才〜どなたでも！ 山内薫さん（東京都墨田区立あ  
ずま図書館員） Kさん（臨床発達心理士）と書か  
れ、中央には絵本『おおきなおおきなおいも』（赤羽  
末吉 さく・絵 福音館書店）の表紙写真が載ってい  
る。

前日の二二日朝九時半にJR福島駅前待ち合わせ九  
時五十分の福島発南相馬行きのバスに乗って南相馬に  
行くことになった。

ところで野馬追文庫のシールに「馬」という字を使  
わせて頂いた書家の乾千恵さんの書展を南相馬図書館  
で開催するという話が並行して進んでおり、乾さんと  
の間を取り持って下さった「NPO法人弱視の子ども  
たちに絵本を」のTさんがこの機会に同行して南相馬  
図書館と打ち合わせをしたいと申し出られた。乾さ  
んの書展「乾千恵書展『月人石』の世界」は最初「浦  
和子ども本連絡会」の三〇周年記念行事として企画  
され、その後そのまま南相馬を巡回するという計画に  
なっている。また乾さんの要望でくだんの「馬」の字  
を南相馬図書館に寄贈したいという申し出もあり、実  
際にリトグラフに刷られた「馬」を持って行って、館

内のどこに飾るのが良いかも確認したいという話にな  
った。併せて、それならば浦和子ども本連絡会の  
Dさんも同行するということになり、総勢4人で南相  
馬を訪問することになったのだった。

二二日の朝、新幹線で福島駅に降り立つとすでにT  
さんとDさんはバス停で待っておられ、早速切符を購  
入してバス停に並んだのだった。Tさんが抱える大き  
な藍染めの風呂敷包みには乾千恵さんの「馬」と  
「月」のリトグラフが二枚入っていた。

バスは福島駅前を九時五十分に出発して途中川俣営  
業所を通り飯館  
村を横切って南  
相馬区役所に一  
時三五分に付  
く予定の福島交  
通のバスで、乗  
客は私達の他に  
数人だった。途  
中の川俣営業所  
を過ぎて飯館村  
に入ると車窓に  
見える家はどこ  
も白いカーテン  
が引かれ人の気



「馬」の字

配が全くないのだった。時々小さな会社のような建物の前に車が見られることもあったが、ほとんど無人の町という印象が強かった。

時刻通りに南相馬市役所に到着したが、Kさんが市長との面会のアポを午後一時の約束で取ってあるというので昼食をどこで取るうかと探していると、市役所近くに食彩庵という古い旧家を改造したようなお店があり、そこで純和風の定食を食べることができた。お店の庭には大きな石造りの蔵やタンクなどがあり、いかにも旧家というお店だった。

市役所はそのお店のすぐ近くにあり、入り口には句碑があつてそこには「野馬追いの行列町を貫けり 鉄之介」とあつた。午後一時にはまだ一〇分ほどあつたが南相馬市役所に行くと市長室に案内された。市長室には模造紙に大きく書かれた「夢と感動 勇気と希望を!! ガンバレ! 南相馬!」はり紙が正面にあり、その下に二〇一二年七月二八・三〇日の相馬野馬追いのポスターが貼られている。脇の壁の上には初代南相馬市長と名誉市民六人の写真が額に入つて飾られていた。

市長との面談は三〇分弱に及んだが、野馬追文庫のことをはじめ、私達が今回南相馬を訪れた経緯について説明し乾さんの書を見て頂いたりした。桜井市長は多くの友人を津波で失つたとも話され、こうした事態

の中で首長として活動できるやりがいについて熱く語られた。アメリカのタイム誌の「世界で最も影響力のある一〇〇人」に選ばれた桜井市の活躍や考えは『闕う市長 被災地から見えたこの国の真実』（桜井勝延、開沼博著 徳間書店 二〇一二年）に語られている。会談後市長はまた公用車に乗って慌ただしく市役所を出て行つた。市役所を辞して前庭に行くど放射能測定器があり〇・三一八マイクロシーベルトを表示していた。

その後歩いて南相馬市立中央図書館へ向かった。南相馬の市内の町並みはまだ半分ほどのお店が閉まつたままになっていくという感じだった。図書館はJR原ノ町駅前位置し、駅側に市民情報交流センターがありその奥に大きな図書館が控えている。駅に向かってコングリートの壁にグリーンの長方形の案内が出ており、その上に「南相馬市図書館」というロゴが配されている。この図書館の基調となる色がグリーンで館内のソファアーなども濃いめのグリーンと薄いグリーンの二色に統一されている。建物は四階建てで図書館の大半は一階と二階にあり三階には閉架書庫の上の部分と電算室、四階は二階と三階を占めるマルチメディアホールの上部分に当たり天空のテラスと称して市域の展望と野外集会のテラスが配置されている。延べ床面積はほぼ五四〇〇平米と大きく面積のほとんどを一階

と二階が占めていることになる。

早速応接室に案内され館長のAさんに会い、乾さんの「馬」を見て頂き、館内のあちこちの壁に置いてみた。図書館の一階にたたみコーナーがあり、その床の間に掛け軸が掛けてあった。その場所に「馬」を置いてみると大きさもぴったり嵌まるのだった。これは表装してお届けし、この床の間に掛けるのが最も相応しいのではと思った。

その後乾千恵さんの書展を行う予定のクラフトルームなどを見せて頂き、副館長のHさんに館内を案内して頂いた。Wさんも常々言っていたように南相馬市図書館は本当にすばらしい図書館であることを見学しながら実感した。一緒にいたDさんが一階の書架スペースから二階を見上げて「この図書館は見えないように見えて、見えているように見えない」と感想を述べたら、Hさんはすかさず「高名な建築家が全く同じことを語っていた。」と話した。つまり館内において人に見られているという意識がないような工夫が凝らされているのだ。また中央の書架スペースの周りには「旅と地図」、「仕事とまちづくり」、「医療と介護」、「宗教哲学」等々の主題を持った小スペースが窓際に並び、低い書架に主題の本が並べられ、窓からは外の景色も見え、その空間にととても落ち着いていて、あたかも自分の家の書斎にいるような気分になるのだ。中

央の書架部分は吹き抜けになっているが、それを取り囲む小スペースが二階にもあって、芸術のコーナーには貸出用の額に入った絵画やポスターが沢山並んでいる。ゴッホの「ひまわり」の隣にはエリック・カールの「はらぺこあおむし」の大きな絵、そして浮世絵から写真まで、これを借りて自宅の壁に一定期間飾っておけるのだ。二階のティーンズコーナーには掲示板があつて、そこには「ひとことカード」というメモが九枚貼られていた。「ひとことカード」にはこんな事が書かれている。「皆さんのオススメや思ったことなど、なんでも書いてボックスに入れてみてください。担当も回答やコメントできるものは頑張つて回答してみます。書いてもらった「ひとこと」は掲示板に貼つたりしたいと思います。」その下に記入欄があつて、例えば「誰を好きになったら、いいかわかりません。

中二男子」と書いてある。その下に『担当より』とあつて「わかるまで放つておくのがいいと思われます。」と担当の回答が書いてある。「受験生は大変です。勉強ばかり。頑張ろうと思つても「やる気」が出ません。どうすれば「やる気」が出ますか。by優杏（〇中）」その回答「受験生さんにあまりなことは言えませんが：参考まで ①中間か期末に達成可能な目標を立ててみる ②志望校の制服を着て高校に通う自分をイメージしてみる ③好きな子と一緒に学校に

行く：：？ ③はむちゃぶりですね、わすれてください：：。」「只今就職活動中の高三女子です。よく履歴書や面接の回答を参考にすべくそれ系の本を借りるのですがどれも転職者用で特に志望動機等が参考にならないかったりします。」今活動している人やこれから活動するであろう人達のためにも新卒者でも参考になる本を置いて下さい。よろしくお願いします。乱文で失礼しました。 日（ ）日「回答「ご要望ありがとうございます。学生さん向けの就活関係の本、余り置いてありませんでした。申し訳ありません。図書館内にある就活の本集めてみましたが、これからもmさんが役に立つ本や面白い本をどんどん加えていきたいと思えますので、情報や気付いたことがあれば、ひとことカードで教えて下さいね。」

どの回答も親身になって答えていて、こんな回答が返ってくるようなら、若者は心を割っているいろいろ聞いてくるのではないだろうか。

結局夕方五時近くまで館内を案内して頂いて五時頃図書館をあとにした。宿泊予定のホテルは図書館の目の前にあり、その足でチェックインした。

その夜、最初に野馬追文庫に係わって下さった保健師のOさんのお誘いを受けて夕方六時半からの駅前居酒屋祭太鼓で開かれる懇親会に同席させて頂くこと

になった。大阪の摂津市から定期的に支援に来ている保健師の方などと南相馬の社協や保健師の方の集うこの懇親会には同行のTさんもDさんも参加することになり、驚かれたという。

祭太鼓はホテルからすぐの所にあり、早めにホテルを出たので原ノ町駅付近を散策していると、駅近くの道路沿いにある「ふくしまインドパーク」という施設が目にとまった。そこはNPO法人フローレンスによって運営されている屋内遊び場で、ネット上では次のように活動が紹介されている。

「キャッチコピー…福島の子ども達が体を使って思いっきり遊べる屋内公園、活動内容…震災による福島での原発事故の影響で、多くの親御様が屋外で子どもを遊ばせることが出来ないという不安を持っており、子どもが外で遊ぶ時間が減っています。子どもはごっこ遊びで創造力を培い、友達と遊ぶことでコミュニケーション能力の基礎を学びます。子どもにとって遊びは、欠かすことができない心の栄養なのです。フローレンスは、福島の子どもたちが思いっきり遊んでもらえる屋内公園を郡山市と南相馬市で運営しています。」開園は一〇時から一八時までなので、室内に人の気配はなかったが、さまざまな大きな遊具が見て取

れた。

祭太鼓での飲み会は六時半から九時近くまで盛り上がり、終わったあとは明日に備えて皆それぞれのホテルに帰った。

ところで、この間野馬追文庫の活動に対して、墨田区の点訳グループ「点訳きつき」から二年にわたり十万円ずつの寄付があつた。また、同じく墨田区の音訳グループ「朗読奉仕くさぶえ」の賛助会員であるBさんから数ヶ月に一度、一万円のご寄付を頂いている。

Kさんの関係では、Kさんの大学の同窓会ジネット（お茶の水女子大学児童学科・発達心理学講座）発達臨床心理学講座同窓会）から、二〇一一年度五十万円、二〇一二年度三十万円のご寄付と二〇一二年十二月から毎月の発送作業に二名ずつお手伝いに来てくださっている。野馬追文庫は「子どもたちへ（あしたの本）プロジェクト」の一つであるので、この他にもあしたの本全体へのご寄付やチャリティーオークションでの収益などから、この文庫の活動（絵本購入・発送費用など）を支えていただいている。（<http://www.jbby.org/ae/link/?lang=ja>）野馬追文庫の活動が継続して続けられているのはこうしたみなさまの支援があつてのこと、感謝に耐えないと共に今後も支援をよろしくお願いしたいと思います。

また、二〇一二年十一月から毎月絵本を利用者から募って集めてお送りくださっている高知こども図書館からは次のようなうれしい報告が、先日あつた。

「こんにちは。Fです。十月になつても三十度を超す気温にやっぱり南国、と実感している昨日今日です。今月分の本、添付のリストの本を本日発送いたしました。今月は嬉しいことに、地元の南高校のJRC部のメンバーが文化祭で作成・販売した南高校オリジナルタオル売上金を野馬追文庫用の絵本にと寄付してくれました。二五〇枚作つて五〇〇円で販売（完売！）。必要経費を差し引いた全額をご寄付くださいました。すでに届いていた十二冊に寄付金で購入した二十五冊を合わせて計三十七冊お届けします。寄付総額は四三、七五〇円。購入した絵本は三〇、八〇〇円です。来月もこの残金で八、十冊、新しい本を購入してお届けできます！間を取り持つてくれたのは、図書館の利用者で、会員でもある南高校の教師でJRCの顧問でもある方です。また、絵本の募集もします、と言ってくれました。とても嬉しいことです。福島のこと、高知の高校生たち忘れていませんよと、どうぞ皆さんにお伝えください。

ではでは、失礼いたします。」

# 「東京漢点字羽化の会」第92～94回

## 例会報告とわたくしごと

木村 多恵子



7月の例会(第92回)2013年7月10日(水)

13:30～15:30、場所、港区ヒューマンプラザ

7階第2会議室

『朝日「備える歴史学」』のグループ編成を決めた。横浜での点字印刷をいつもの方がしてくださった。新しくご入会くださった方に朝日新聞から、5回に渡って連載されていた「本をたどって」という記事を入力、校正、そして、他のお一人に仕上げ校正をしていただくことにし、最終的には岡田さんに見ていただくことにした。

「本をたどる」はすでに木村も読ませていただいた。古語辞典の文字についても打ち合わせた。

8月の例会(第93回)2013年8月14日(水)

13:30～15:30、場所、港区ヒューマンプラザ

7階第2会議室

「備える歴史学」のグループ編成を決めた。

今月の印刷はお休み。

日盲社協60周年記念イベントが、2013年9月9

日午後、「ホテルグランドヒル市ヶ谷」において開催される。そのイベントの後、14:45～16:00に、表彰式がおこなわれる。

全国の視覚障害者の、福祉施設や、団体に、個人、あるいはグループで、ご奉仕して下さっている方への表彰式である。

今年「東京漢点字羽化の会」の齋藤寿美子さんが授与されることになった。

齋藤さんは、およそ30年前から、漢点字のためにご奉仕くださっている。それは、長い年月というだけでなく、正確さ、緻密さ確実さにおいて卓越した能力をもって、大きな働きをして下さっている。齋藤さんは、筆記具が点字版しかないころから、一点、一点、漢点字表を見ながら漢点訳をなさった方である。当然現在ではパソコンを大いに駆使されている。この働きぶりは会全体の皆様の手本となってくださっており、しかも謙虚でいらつしやるので、皆様が尊敬していらつしやるので、一も二もなく賛成して下さった。

9日の当日には、会員のお一人が同行されることになった。

岡田健嗣著「漢点字テキスト」の点字と墨字の印刷をする。点字は横浜の皆様が印刷してくださるので、墨字を9月の例会の日、12時に集まって印刷製本をすることにした。

横浜国大の名誉教授、村田忠禧先生が、『日中領土問題の起源Ⅱ公文書が語る不都合な真実』を2013年6月に上梓された。

古語辞典の入力について、今回も確認事項があった。

9月の例会(第94回)2013年9月11日(水)

12:00～15:30、場所、港区ヒューマンプラザ

7階第2会議室

例会の定例時間よりずっと早い12時から集まっていたので、講習会用漢点字テキストの第6巻を墨字印刷、製本を6部作った。

齋藤さんが、日盲社協から漢点字活動に対して表彰され、その報告をいただいた。社協60年記念である。当日の点字の資料も見せていただいた。表彰された方だけの懇親会があったが、活動報告は、時間が足りなくて、所属団体名と各自の名前を言うだけになってしまったという。会員のお一人が、各地のボランティア活動について参考になれば、とお考えくださって、齋藤さんに同行くださったが、そんなわけでご足労いただくだけになってしまった。Sさん済みませんでした。ありがとうございます。

9月18日に横浜へお二人の方が印刷に行ってくださいることになった。よろしく御願いたします。

「備える歴史学」入力担当者の組み合わせを決めた。

日本漢点字協会から「補助漢字」がこの11月ころに点字と墨字で正式に発行される。

「古語辞典」の入力方法について、岡田さんが、幾つか説明をした。「く」の項まで入力は進んだのとである。

横浜で行っている「萬葉集釋注」の校正をお手伝いするので、11月の例会に、横浜の担当者が説明にいらっしやる。

「岩波古語辞典」の「あ、い、う、え、お」の項目の入力が完成し、岡田さんがEIBファイルで読みやすいように作ってください、木村も読めるようにしてください。ファイルを開くと、「へあ」へ吾・我」の項が最初に出てきて、ドキドキし、うれしくなりました。皆様ありがとうございます。

学習会は休会になってしまったので、10月19日が第71回になる。

講習会用漢点字テキストの点字版、第6巻をいただいた。

#### \* 予告

10月の例会(第95回)2013年10月9日(水)

13:30～15:30 ヒューマンプラザ7階竹芝小ホール



10月の学習会(第71回) 2013年10月19日(土)

18・30〜20・30 ヒューマンプラザ7階第2会議室

11月の例会(第96回) 2013年11月13日(水)

13・30〜15・30 ヒューマンプラザ7階竹芝小ホール

11月の学習会(第72回) 2013年11月16日(土)

18・30〜20・30 ヒューマンプラザ7階第2会議室

12月の例会(第97回) 2013年12月11日(水)

13・30〜15・30 ヒューマンプラザ7階竹芝小ホール

12月の学習会(第73回) 2013年12月21日(土)

18・30〜20・30 ヒューマンプラザ7階第2会議室

## わたくしと

わたしが見たことの無いもの、「想像の中であつかせないもの」と、現実に触って見られるものや、本当に知っていることとを、単純に結びつけて「知っている」と錯覚することがよくある。このことは、わたしの想像力の乏しさだけではないと思うけれど、その落差の相違は、わたしが考えられないほど大きいに違いない。だからと言って、最初から諦めて「想像力をめぐらす楽しさ」を止める気はない。

なぜならそれはわたしにとって豊かな遊びだからである。

そして、ふとした折りに、あるキーワード、あるいはほんの小さなきっかけから、自分が思い描いてい

た、幾つかの共通項を見つけ、突然自分の心に響いてきて、無性にうれしくなる。とは言え、それはごく日常の身の周りのありふれたことである。

7、8年ほど前の6月、友人に誘われて、「視覚障害者のための手で見(み)る博物館」へ行った。

最初に見せていただいたのは「太陽系惑星」の模型である。太陽を中心に据え、太陽から水星まで紐でつながり、水星の大きさはビー玉よりずっと小さい丸い玉であった。次に太陽から金星まで紐でつながり、金星と地球の距離感が分かるように、水星と金星のあいだも紐でつながってあった。このようにして、太陽から地球、金星と地球。太陽から火星、地球と火星とを結んであった。「水、金、地、火、木、土、天、海、冥」と、一つ一つの大きさも当然異なる、実際の星々の何分の1に当たるかは覚えていないけれど、縮尺された模型を先生がお作りになったという。太陽の大きさは、子供のころの運動会で使った玉転がしの玉よりわたしには大きく思えた。先生は、この太陽の大きさにまで膨らませるのに、足踏みの空気入れで二日間もかかったと言われた。

もう一つ印象的なものは、江戸時代の「キリスト教禁制」を徹底するために用いられた銅板の「踏み絵」であった。彫りの減ったところまで分かった。何の心

の痛みも無く踏んだ人、迷いに迷って踏んだ人。その迷い方からキリスト教徒と見破られた人たちのことを思った。そして、わたし自身だったらどうだったのか、など考えさせられた。今この時点なら踏んで見られる。それでも躊躇した。

この初めての体験は、わたしをすっかり魅了させた。ただこのときはわたしを含めて22人、恐らくガイドヘルパーもいたので全体の半分の人が視覚障害者だったと思う。それでもこういうものを実際に触るには人数が多すぎた。

そして、昨年11月、最初に誘ってくれた友人が、「今度は個人で行きましょう」と言ってくれ、3人で出かけて行った。

コウモリやムササビ、白鳥、ライオン、オオカミなどの剥製を触っていた。「コウモリの指のあいだに幕が張り、それが翼になり、親指1本だけでしっかりと木に捕まっけていられるのです」と先生は教えてくださった。

この剥製を触っている中で、ライオンの背中毛並みの方向が、頭に近い方は頭の方へ、尻尾に近いところは尻尾の方へ流れていたのがおもしろかった。これは背中を中心に、人間の頭でいえば、つむじのようなところがあって、そこから尻尾の方向と、頭の方向へ

と流れが分かれているのだ。

ツキノワグマの毛皮も触った。宮沢賢治の「なめとこ山の熊」に出て来る小十郎（こじゅうろう）の、仲間でもあり、同士でもあった、一番大きいツキノワグマは、こんな風な毛皮を着ているのかと思った。

次に先生が「多恵子さん、これはエゾ鹿の毛皮です」と見事に分厚い毛皮を持たせてくださった。密生した毛の量と長さに驚いた。しかもつややかでなめらかだ。

「これはウタラ？イララ？」と小さく言ってしまった。

このころ、偶然『鹿の谷のウタラとイララ』という本を読んでいた。「松居友（まついととも）作、本田哲也（てつや）画、小峰書房」

この本は、エゾ鹿の兄弟が、北海道の大自然、千歳の森を舞台に、著者のイマジネーションの世界を作り出したものである。

エゾ鹿の兄弟の兄ウタラと、妹のイララの物語は、突然いなくなってしまう妹のイララを探し求めて、兄のウタラが、生（この世）と、死（あの世）のあいだを行きつ戻りつしながら、やっと妹のイララと再会し、再び生（この世）に戻ってくるという、大自然と、自分とのたたかいの物語である。

ウタラとイララは、早春の美しさに誘われて小川のほとりへ遊びに行く。そこで、金色にかがやく立派な雄のエゾ鹿に出会う。兄弟はその牡鹿は、自分たちがまだ会ったことのない父親だと直感する。

ウタラとイララが母の胎内にいたとき、大きな雪崩が鹿の谷を襲った。そのとき、父のクンネは、仲間を安全な場所へ導き、なおも森の古老のシマフクロウを助けるために危険な森へと戻って、シマフクロウを救い出し、自分はその雪崩に打たれて死んだのだと、母のシロトクから聞いていた。

魅力的な光に包まれた牡鹿に引きつけられて、ウタラとイララは、喜んで父の後について行った。かがやく光と不思議な笛のような響きは、二人を森の奥へ奥へと誘い、ふとその響きが消えたとき、ウタラは急に不安になって振り向くと、直ぐ後ろについて来ていると思ひ込んでいたイララがいないことに気づく。ここからウタラの死闘が始まる。

わたしは、若いエゾ鹿の颯爽と走る姿や、一組の恋人たちの優しく初々しい様子や、婦夫（めおと）となったシロトクとクンネ、そして、子供から、まだ大人になりきる前の頑張り屋のウタラを想像した。

動物の毛皮を着ることは知っているが、アラスカや

南極など、本当に寒い地域で暮らす人はともかく、こういうものを実際に身につけることに抵抗を感じていわたしであるが、寒さよけとは違った意味でこの毛皮には特別な親しさを感じた。わたしはこのエゾ鹿の毛皮をマントのように羽織らせていただいた。このままオーバーとして使えるほどの大きさで、わたしの背も、肩も、腕もたつぷり覆ってくれた。「素敵、でもワイルドな感じになった」と一緒に行った友人が興味しんしんで見ていた。

毛並みに添って撫でながら「ウタラ、よく頑張ったねえ」と心の中で静かにねぎらった。

日頃は動物にさほど愛情を持たないわたしであるが、こんなことからエゾ鹿には興味を沸き、ラジオから流れるニュースで、「エゾ鹿」という言葉が耳に入り、気をつけて聞いていると、エゾ鹿が増えすぎて困っているという、北海道の話題に、残念さと危惧を感じたのは我ながら不思議だ。

\* 文中の博物館について

NPO 法人「視覚障害者のための手で見える博物館」

館長 桜井政太郎

副館長 川俣わか

盛岡市東中野字五輪7-1

2013年10月11日(金)

出師表

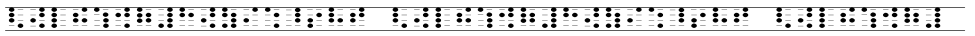
(二)

宮中・府中・俱為一體。  
 陟罰臧否、不宜異同。若有  
 作、姦犯科、及為忠善者、宜  
 付、有司、論其刑賞、以昭陛  
 下、平明之治、不宜偏私、使  
 內、外異法也。侍中・侍郎、  
 郭攸之、費禕、董允等、此皆  
 良、實、志慮忠純、是以先帝  
 簡、拔、以遺陛下、愚以為、  
 中之事、大小無不悉、以諮  
 之、然後施行、行必能、  
 漏、有、所、益、也。

渡辺精一『朗読してみたい中国古典の美文』  
 (祥伝社新書) より、「三國志の美文」参照

宮中・府中は俱に一体たり。臧否を陟罰  
 すること、宜しく異同あるべからず。若し  
 姦を作し科を犯し、及び忠善を為す者有ら  
 ば、宜しく有司に付して、其の刑賞を論じ  
 て、以て陛下の平明の治を昭らかにすべ  
 し。宜しく偏私して内外をして法を異にせ  
 しむべからざるなり。侍中・侍郎の  
 郭攸之、費禕、董允らは、此れ皆良実にし  
 て、志慮忠純なり。是を以て先帝簡拔し  
 て、以て陛下に遺せり。愚以為、えらく、宮  
 中の事は、事大小と無く、悉く以て之に諮  
 り、然る後に施行せば、必ず能く闕漏を  
 裨補して、広く益する所あらん。

劉備なき後、蜀の年若い君主・劉禪に奉つた諸葛亮  
 孔明の「出師の表」(Ⅱ出征前の上奏文) 前回の続き。  
 宮中と政府はともに一体でなければならず、善悪  
 の行いに対する賞罰に異同があつてはならない。先帝  
 の代からの信頼できる官人達の名をあげ、宮中のこと  
 はすべて彼らとよく相談して決めるようにと説く。



宮 中 ・ 府 中 ハ 、 俱 ニ 為 リ 一  
 体 。 陟 罰 スルコト 臧 否 ヲ 、  
 不 ベカラ 宜 シク 異 同 アル 。 若  
 シ 有 ラバ 作 シ 姦 ヲ 犯 シ  
 科 ヲ 、 及 ビ 為 ス 忠 善 ヲ  
 者 、 ベシ 宜 シク 付 シテ 有 司  
 ニ 、 論 ジテ 其 ノ 刑 賞 ヲ 、 以  
 テ 昭 ラカニス 陛 下 ノ 平 明 之 治  
 ヲ 。 不 ル ベカラ 宜 シク 偏 私 シ  
 テ 使 ム 内 外 ヲ シテ 異 ニセ 法  
 ヲ 也 。

三国志グッズとして手ぬぐいまで売られているという「出師の表」



“危急存亡の秋”で有名な孔明の“出師表”をモチーフにした手ぬぐい。大国“魏”を討つべく立ち上がった、凛々しい表情の孔明と、“出師表”を綴る孔明の姿が胸を打つ、こだわりの一枚。  
 (ネット掲載の画像と宣伝コピーより)

## 「」報告と「」案内

### 一 日本盲人社会福祉施設協議会の表彰

日本盲人社会福祉施設協議会は今年、設立六十周年を迎えられました。去る九月九日（月）に、東京のホテル・グランドヒル市ヶ谷で、記念式典と祝賀会が催されました。その席で、漢点字の部門で、東京漢点字羽化の会の齋藤寿美子さんが、ボランティア表彰を受けられました。

齋藤さんは、長年漢点字訳のボランティア活動にご参加下さっております。二〇〇五年には、東京漢点字羽化の会の発足に当たってご尽力下さり、それ以来活動と運営に欠かせない存在でございます。本会の活動は、パソコンでテキスト



齋藤さんに贈られた感謝状

を入力し、校正し、レイアウトを定めて、本の体裁を整えて行くというプロセスを踏みますが、そのプロセスのどこにでも、適切にご意見を賜っております。本会の活動は誠に地味なものです。齋藤さんはなお縁の下の力持ちを地で行くように関わって下さり、本会の活動への貢献度は、甚だ大きなものがございます。謹んで御礼申し上げます。

齋藤さん、この度は大変おめでとうございます。引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。

### 二 村田忠禧先生のご本

本誌前号で紹介しました、横浜国立大学名誉教授・村田忠禧先生が上梓された、『日中領土問題の起源―公文書が語る不都合な真実』（花伝社、2013年6月）の漢点字版と音訳版の製作を計画しております。

漢点字版は花伝社様のご許可をいただいて、パソコンのファイルの形でご提供いただいて、入力と校正のプロセスを割愛して、効率的に漢点字書を製作したいと考えております。発行所の花伝社様に、そのご許可をお願いしております。実現すれば、EIBファイルの形で、読者の皆様にお読みいただく予定でござ

ございます。

音訳版は、墨田区立ひきふね図書館に製作を依頼しました。現在音訳者の方による下調べを終えて、音訳に取りかかっておられます。

完成しますと、ひきふね図書館の蔵書となりますので、全国どちらでも、地元の図書館を通して、ご利用いただけます。

お待ちください。

### 三 『岩波 古語辞典』

東京漢点字羽化の会では三年あまり前より、『岩波古語辞典』（大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編、岩波書店、一九九〇年第一刷発行）の「ア行」のEIBファイルが完成しました。

全体が完成すると、誠に大部なものになることが予想されますので、読者の皆様には、EIBファイルをご提供したいと考えております。

今回完成しました「ア行」も、1775KBの規模になって、漢点字書にしますと、十七分冊にもなってしまいます。それを「ア・イ」と「ウ・エ・オ」の二つのファイルにまとめることで、検索が極めて容易に、滑らかにできることを確認しました。

勿論完成までの道のりはまだまだ遠いのですが、一

区切りずつまとめることで、活動の成果の指標として、活動の励みになるものと存じます。

会員の皆様、相変わりがませずどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

読者の皆様には、無料でファイルをご提供致します。お申し出下さい。

### 四 『萬葉集釋注』

横浜漢点字羽化の会では、昨年度納入分として横浜中央図書館に納めました漢点字訳書、『萬葉集釋注』（伊藤博著、集英社文庫）の第一巻に続き、今年度分として納入を予定しております第二巻（巻三、巻四）の姿が見えてきました。一分冊二百ページ前後、全九分冊となる予定です。

納入は今年度末、来年度（二〇一四年度）初めには、図書館の書架に並ぶはずです。

同書昨年度納入分を初め、これまでに完成した漢点字書は、漢点字版としてご提供致すばかりでなく、EIBファイル版、BMTファイル版の形でもご提供致します。ご希望の方は、お申し出下さい。

『萬葉集釋注』第二巻の内容は、次号でご紹介致します。ご期待下さい。

## 編集後記

▼今号は原稿の量が少なかつたので、若干薄めの冊子となりましたが、岡田さんの「漢点字の散歩」は、「読書」というものに対して、あらためて多くのことを考えさせられる、貴重な一文となっています▼この情報過多の時代において、毎日目にする文字の量は膨大なものがありますが、そこに岡田さんのいわゆる「読書のフィードバック」というようなプロセスが介在するような読書の機会はありません。岡田さんが求められる漢点字書は、まさにそのような読書に耐えうる内容の書物でなければならぬのでしよう▼『常用字解』は、漢点字書としてすでに完成し、図書館に納められています。これを音訳しようと、音訳グループの方たちが毎日のようにMLを交換して1字1字の解釈について議論を交わされています。端から見ても気の遠くなりそうな大変な作業です。こうして練りに練った内容の音訳書が完成すれば、漢点字にまでは手が届かない視覚障害者の方々にとって、「漢字」そのものの理解の大きな助けになるものと期待されます。

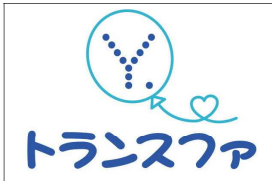
(木下 和久)

## (有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。



〒231-0063横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1104

電話： 045-263-0306

FAX： 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : okada\_tr\_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://www.ukanokai-web.jp/>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は1月15日です。

※本誌(活字版・DAISY版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。